

議論したりないと感じた。

協同組合教育

協同組合教育について堀越さん（山梨学院大学）から「既存組織での協同組合教育は、企業内教育のプラスアルファという位置づけでしかない。協同組合教育も、従来の学校教育がもっている押しつけ・受け身・資格取得という教育と同じようになっていないか。協同組合の中に相互自助・自立協同という価値理念があるが、その観点で学習・教育の中でつらぬかれるかどうか大事なポイントになると思う。『協同の発見』（本誌12頁）に書いている。協同組合の組織構造・協同組合がめざしている事業やしくみの中から、教育も大きく違う何かが出てくる可能性があると思う。」との発言をいただき、センター事業団の菊地さん・古村さんから今の労協の中での協同組合教育について語ってもらった。

「演劇と運動会のクラスでいえば、労協は運動会の集団といえる、事業をやっていかなければならないからだ。一定話し合っても、どこかで判断

して見切って進めざるをえないこともある。しかし、自分たちが食べていくことを引きずりながら、話し合っようというのを貫いていくやり方に普通の企業とは違う文化があると思う。」

「労協には35歳以下の事務局員が130人ほどいるが、そこがどう育つかは協同組合がどう保てるかの岐路のような気がする。社会と自分をどう整理していくかを教育の問題として考えること。もうひとつは協同するということはどういうことを追い求めること。つぶそうとするものと闘わなくてはならないが、若者に当てはめると“社会と自分”“闘うことと協同する”ことがつながらない。そこをつなぐ作業が教育の側面としてあるのかと思っている。」ということで、協同組合教育を次への課題として研究会を閉じた。

幅広い世代が、しかも様々な職業の人間が横並びになって論議ができる機会はありそうでいて、そう多くはない。世代の価値観なり認識の違いを意識したところから、はじめて何を伝えるか・どう伝えるかということで、“教育”が語られていくのではないかと感じた。（まとめ：佐藤弘子）

若者たちが希望をもって

働き続けられる職場と社会

——新規参入農業青年の場合——

中島 紀一（茨城県／農業・生活専門学校鯉淵学園）

仙台での全国協同集會に参加して、さまざまな分野で、志ある若者たちが新しい仕事を求め、新しい職場の開拓と創造に取り組んでいる様子を知り感銘を受けた。

歴史を振り返れば、若者たちの仕事への就き方にはいくつかの変遷があった。まず、家業を継ぐことがいっばん普通の就業形態という時代があった。家業を継ぐ条件のない若者の場合は手に職を

つけるという道を選んだ。女性の場合には、嫁出を前提としてとりあえず奉公にできることが多かった。次の時代になると男女を問わず企業への就職が普通の就業パターンとなる。仕事の内容は、職工、女工、労働者というイメージからサラリーマン、OLという言葉のイメージへと変化し、日本労働社会の基本的枠組みは企業社会となった。そして現代、若者たちのかなりの部分で、企業社会

的労働社会に違和感を覚え、あるいは体質的拒絶感に気がついて、仕事の就き方に関して、別の道はないかとの模索が始まり出している。

彼らが求める仕事のあり方はさまざまなようだが、共通した特徴としては、仕事の質、自分と周りの人々との関係性の重視などが挙げられる。仕事の質に関しては、手応えのある仕事、身体性、環境、自然、生命、福祉などとの連関性が意識されている。関係性については、「自分とは」という問いと「共に働く人々との協同」という2つをともに求めたいという気持ちのようだ。

仕事に就くということをめぐる若者たちのこうした新しい動きと連動してのことだろうか、農業分野にも若い活気がみられるようになってきた。家業としての農業を継ぎたいという若者も増え始めたし、非農家出身だが農業を仕事としたいと希望する若者も目立って増えてきた。いずれの場合も、いやいやながらの宿命的就農という暗いイメージではなく、希望にもとづいた選択的就農という明るいイメージが似合うようになってきている。

とはいっても現実には就農自体にたくさんの困難性がある。農家の跡取りの場合にも、労働時間や休暇のあり方、報酬の水準、同業の仲間の少なさ、親との関係など、まだまだ問題は多い。非農家出身者の場合ももっと大変だ。農地を確保して自分で農業を始めようとしても、入手できる農地はみつからないし、購入資金もない。農地があったとしても作物を育てる技術がない。そこで法人経営などへの就職を考える人が多いのだが、いざ調べるてみると、選べるほどの求人情報がない。

そんな難関を抱えながらも、農業者としてのスタートをきる若者たちは少しずつだが確実に増えている。そこに至るまでの彼らの決断、努力、頑張りを知る人間としてまずは大きな拍手を送りたい気持ちだ。

しかし現実には、職に就くということでは問題は終わらない。仕事に関していわばオルタナティブな選択をした若者にとって、本当の困難は、あ

る程度仕事に馴れたところで直面する「それで将来はどうなるの」という問題だ。

農業の法人経営スタッフとして職についた青年を例にとると、20歳前後の若者が一応食べるくらいの給料は得られても、結婚をして、子どもを育てて、親を扶養して、といった人生設計を支えるほどの収入拡大の可能性は開かれていない。福利厚生面はもちろん、年金、労災、退職金等の社会的保障という点でも状況はかなり絶望的だ。仕事の中味に関して、自然のなかで汗水流すというレベルについては文句はないのだが、農業経営の意思決定という領域に関しては彼らの活躍の場は用意されていない。また、農村生活者という面でも、地域社会で一人前として扱われる前提は一家を構えるということであり、いわゆる「家」をもたない彼らは人のよい半端者という位置から抜け出すことは難しい。

農業の道に進んだ青年たちの前にはだかこのような状況は、都市の場でオルタナティブな仕事のあり方を模索する若者たちをめぐる状況とも相当にかさなるのではないだろうか。仙台の協同集会での若者たちの発言を聞いていて切実にそう感じた。彼らの頑張りによくわかる、確かに彼らは仕事に関して新しい世界を拓きつつある、しかし、その次の展開はどうなるのか。この難題を先行者としての彼らだけに背負わせるのはあまりにも酷ではないのか。

おなじようなことは学校教育についても感じられる。私の職場は専門学校で、職業人として生きる実力を備えた若者を世に送り出すことが課題とされている。入学の時点では、農業専門学校という場をやっと探り当てた彼らに、何はともあれ農業の楽しさや大切さを知ってもらい、4年間の学びの期間を前向きに過ごせるよう、できるだけきめ細かなお世話をするようにしている。こうしたお世話が一応成果を挙げたとして、だが本当の問題は、学校という下支えを前提に成長した彼らが、いよいよ社会に巣立とうとした時、彼らの実力とせちがらい社会との落差なのだ。入学時点で

は志高くと論じ、卒業時には厳しい社会で生き抜くには実力不相応な夢に寄りかかってはだめだと現実主義を説き、彼らに強くなれ、逞しくなれとばかり言わざるを得ない現実がある。専門学校という場では、こうした矛盾、こうした限界から眼を逸らすことはできない。彼らを叱咤激励するばかりでは事態は改善されないのだ。

要するに、仕事の就き方について新しい道を探ろうとする若者たちの行為は、結局は彼らだけの世界では完結できず、不可避的に社会全体のあり

方の組み立て直し、あるいはそこまで言わないとしても、彼らの模索を全うさせられるだけの社会的仕組み作りという、大人たちも含めた大テーマへと進まざるを得ない。若者たちの新しい選択に拍手する大人たちには、先行者としての若者たちが突きつけたこの大テーマに関して、彼らと共に格闘することが求められているように思える。仕事づくりをめぐる協同活動はこうした文脈の中で大きな意味をもっていくのだろう。

手づくりの企画「川田龍平講演会」

——黄柳野高校生のとりくみ

成し遂げた講演会

古山 賢

1997年1月18日(土)午後1時。川田龍平さん講演会スタート。テーマは、「がんばる人のLIFE & MESSAGE」。そう…、この講演会を成功させるために歩んできた道は長かった。

前回の講演会の教訓『計画は1年前にすべし』を頭に思い、計画は約1年前にたてられました。4月には、川田さんの母・悦子さんに龍平さんの出演依頼をし、とてもいい返事をもらいました。しかし、予定は未定。計画はスムーズにいきませんでした。出演が確実じゃない為、先の見通しがつかず、何も手につけられないまま月日が流れていきました。そんな中、持ちあがった話は、東京に行って龍平さんとの直接交渉でした。話はすぐにまとまり、東京へ行きました。そこで龍平さんの講演を聞き、最後に代表の福田君が交渉を挑みに行きました。龍平さんは心よくOKしてくれま

した。学校へ戻ってからの僕たちはOKの返事もらった事で、すこしそわそわしていました。しかし、ここからが悪戦苦闘の始まりでした。龍平さんと講演会の日を決めるために、FAXなどで遣り取りしました。しかし、返事がなかなかこないという状態で、決まらないまま月日が流れていきました。日が決まらないのでポスターもチケットもつくれず、宣伝活動もできませんでした。

結局決まったのは約1ヵ月前。みんな慌てて作業にとりかかりました。ちょうどこの頃バンド「ルーズ」が演奏に来られなくなったなどのハプニングが重なり、まさにパニック状態でした。そんなこんなで、どうして成功にもっていったのかというと、みんなの協力でした。喋った事のない1年生やサークルでない人達、さらには一般の人達による協力に支えられ、僕たちは少しづつ先が見えてきて、そこからラスト1週間、根性とチームワークで乗り切っていきました。前日も徹夜で頑張りました。

よって、生まれたものは『成功』であり、それ